

日本社会学会 ニュース

発行：一般社団法人 日本社会学会

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学文学部社会学研究室内

tel 03-5841-8933 fax 03-5841-8932

<https://jss-sociology.org/>

email:jss@sociology.gr.jp

編集責任者：関礼子・稲葉昭英（庶務理事）

2025.1.17

No.243

I. 第97回大会について

1. 第97回大会報告……………2
2. 2024年度社員総会・会員集会報告……………2

II. 第98回大会（2025年度）について

1. 次年度大会について……………4
2. 一般研究報告について……………4
3. 一般研究報告Ⅲ（テーマセッション）のテーマとコーディネーターの募集要領……………4
4. シンポジウムについて……………5

III. 各種委員会等からのお知らせ

1. 第97回大会について
 - (1) 要旨集の修正について……………6
 - (2) 一般研究報告と委員会企画テーマセッションについて……………7
 - (3) シンポジウムについて……………7
 - (4) 招待講演について……………11
2. ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョン推進委員会新設のお知らせ……………12
3. 広報委員会からのお知らせ……………12
4. 社会学系コンソーシアムからのお知らせ……………12
5. 国際発信強化委員会からのお知らせ……………14

IV. 第23回日本社会学会励賞…………… 15

I. 第97回大会について

1. 第97回大会報告

第97回日本社会学会大会（開催校・京都産業大学）は、2024年11月9日（土）～11月10日（日）に、京都産業大学で開催されました。参加者は会員930名（うち学生159名）、非会員231名（うち学生150名）、合わせて1,161名でした。一般研究報告数は、自由報告（一般研究報告I）が276、ポスターセッション（一般研究報告II）が7、テーマセッション（一般研究報告III）が123でした。部会数は、自由報告が44部会、テーマセッションが22部会となりました。

シンポジウムは「ダイバーシティ & インクルージョンの社会学——理論的・方法論的・実践的観点から」、「若手のキャリアパス——世代・ジェンダー・地域の視点から」の2部会と、学会創立100周年記念国際シンポジウムとして「激動する世界における社会学の役割」の合計3部会を開催しました。

招待講演は、本年度学会奨励賞を受賞された松浦優会員（論文の部）、林凌会員（著書の部）の2名にお願いしました。

今年度の学会大会は、開催校・京都産業大学のみなさまや司会をお引き受けいただいた方々のご尽力によって滞りなく行われ、貴重な成果をあげることができました。心より感謝申し上げる次第です。

（庶務理事）

2. 2024年度社員総会・会員集会報告

2024年度社員総会・会員集会は、2024年11月9日の12時50分から、京都産業大学において対面形式で開催されました。会長挨拶に続いて、石井由香理・杉野勇両会員が座長に選出され、庶務理事から会務報告が、各委員長から委員会活動報告が行われました。国際交流委員会からは、本年度のトラベルアワード受賞者の紹介がありました。

次に、以下の議案が諮られました。

（第1号議案）「役員候補者選出規則」第4条の改訂について

奥村隆理事より「役員候補者選出規則」第4条の改訂について説明があり、承認されました。

（第2号議案）「一般社団法人日本社会学会運営規則」第3条（会費）の改訂について

三隅一人理事より「一般社団法人日本社会学会運営規則」第3条（会費）の改訂について説明があり、承認されました。

（第3号議案）2023年度決算

三隅一人理事より2023年度決算について説明があり、承認されました。

（第4号議案）2023年度決算監査報告

玉野和志監事より2023年度決算監査報告について説明があり、承認されました。

（第5号議案）2024年度予算

三隅一人理事より2024年度予算について説明があり、承認されました。

（第6号議案）第98回大会の開催について

佐藤嘉倫会長より、第98回大会開催校を一橋大学にお引き受けいただくことについて説明があり、承認されました。

（第7号議案）顧問の推挙について

佐藤嘉倫会長より、伊藤公雄前会長の顧問への推薦について説明があり、承認されました。

会員集会・社員総会に引き続いて、14時30分より2024年度定時社員総会が開催され、49名の代議員が出席しました（委任状出席含む）。定時社員総会では第1号議案から第7号議案について代議員による議決が行われ、いずれも承認可決されました。

（庶務理事）

Ⅱ. 第98回（2025年度）大会について

1. 次年度大会について

次年度大会は、2025年11月15日（土）、11月16日（日）の両日、一橋大学国立キャンパスで開催されることになりました。また、2024年12月14日（土）に研究活動委員会が開かれ、各種募集日程・要領が下記のとおり決定されました。

2. 一般研究報告・研究活動委員会企画テーマセッションについて

(1) 一般研究報告Ⅰ（自由報告）

申し込みの締切は**2025年6月20日（金）正午（厳守）**の予定です。

(2) 一般研究報告Ⅱ（ポスターセッション）

申し込みの締切は**2025年6月20日（金）正午（厳守）**の予定です。

(3) 一般研究報告Ⅲ（テーマセッション）

テーマとコーディネーターを**2025年2月28日（金）正午（厳守）**で募集します。下記の募集要領をご覧ください。テーマセッションへの報告申し込みの締切は**2025年6月20日（金）**の予定です。

なお、報告を申し込みできるのは、(1)～(3)のどれか1つだけです。募集の詳細は、4月学会ニュースに掲載されます。

3. 一般研究報告Ⅲ（テーマセッション）のテーマとコーディネーターの募集要領

次年度大会における一般研究報告Ⅲ（テーマセッション）のテーマとコーディネーターを、下記の要領で募集いたします。

応募にあたっては、報告者があらかじめ限定されることがなく、なるべく多様な報告者が応募できるようご留意ください。なお、書評の内容を含むセッションでの応募をご希望の場合は、テーマセッションにふさわしい題目と趣旨で応募ください。

3月の研究活動委員会で開催セッションを内定し、4月学会ニュースで報告者の募集を行います。その応募数に基づいて最終的にセッションの成否を判断し、その後コーディネーターの方々に応募者への連絡や報告順決定などを委任することになります。

(1) 応募の締め切りは**2025年2月28日（金）正午（厳守）**です。応募書類を、下記のGoogleフォームから送ってください（<https://forms.gle/9j7kaBXp1DyV1c8t7>）。

(2) Googleフォームに、①コーディネーター名・所属・連絡先（住所・電話・電子メール）、②テーマ、③趣旨（視角・理由などを日本語セッションでは800字程度、英語報告を認めるセッションでは英文趣旨を300words程度で合わせて提出）、④使用言語、の4項目について記入してください。なお、使用言語は日本語と英語に限ります。開催が内定した場合は、この原稿がそのまま次回ニュースの報告者募集原稿となります。

(3) テーマセッションのコーディネーターは1名とし、自薦に限ります。コーディネーターは、原則として司会を兼ねます。なお、当該のテーマセッションにおいて、コーディネーターが報告者（連名を含む）となることはできません。

(4) セッション成立の条件は、報告数4件以上です。

(5) 同一コーディネーターがテーマセッションに応募できるのは、連続2大会までとします。

(6) 日本語セッションにおける英語での発表は、コーディネーターが認めれば行えます。

4. シンポジウムについて

次年度大会では、「モダニティ論のフロンティア：現代日本社会からベック理論を問い直す（仮）」と「社会学は不平等にどう取り組めるのか：「社会階層」をめぐって（仮）」の2つのシンポジウムを予定しています。詳細につきましては次号のニュースでお知らせいたします。

（研究活動委員会 数土直紀）

Ⅲ. 各種委員会等からのお知らせ

1. 第97回大会について

第97回日本社会学会大会（開催校・京都産業大学）は、2024年11月9日（土）～11月10日（日）に、京都産業大学で開催され、盛況のうちに終了しました。

（1）要旨集の修正について

Web公開した大会プログラム・報告要旨集に以下の変更・修正がありました。この一覧は下記URLからも確認できます。

<https://jss-sociology.org/other/20240821post-16642/>

【学史・学説】部会

欠席：Sooryamoorthy Radhamany（University of KwaZulu-Natal）

【災害】部会

報告辞退：出口杏奈（岡山大学大学院）

逝去欠席：岩本健良（金沢大学）

【地域社会・地域問題(1)】部会

報告辞退：武田俊輔（法政大学）

【階級・階層・移動(1)】部会

逝去欠席：岩井八郎（摂南大学）

【階級・階層・移動(4)】部会

報告辞退：石田賢示（東京大学）

テーマセッション【日本の子育て格差】

所属先変更：打越文哉（ハーバード大学）

【都市】部会

報告辞退：笹島秀晃（大阪公立大学）

【地域社会・地域問題(2)】部会

報告辞退：傅昱（東北大学大学院）

【福祉・保険・医療(2)】部会

報告辞退：菅森朝子（立教大学）

【性・ジェンダー(5)】部会

欠席：高橋幸（石巻専修大学）

テーマセッション【ポピュラー・カルチャーの文化社会学の「知」とその「場所」】

報告辞退：中村香住（慶應義塾大学）

【国際・エリアスタディ(1)】部会

所属先変更：今里基（兵庫県立大学）

【家族(4)】部会

司会者変更：黒川すみれ（福岡県立大学）

【教育(2)】部会

欠席：任夢園（金沢大学）

【性・ジェンダー(3)】部会

報告辞退：宮崎あゆみ（日本女子大学、国際基督教大学）

報告辞退：松本紀奈子（国立大学法人千葉大学大学院）

【差別・マイノリティ】部会

報告辞退：有賀ゆうアニス、佐藤祐菜（大阪公立大学）

ポスターセッション

報告辞退：新田雅子（札幌学院大学）

報告辞退：劉文静（岩手県立大学）

（2）一般研究報告と委員会企画テーマセッションについて

一般研究報告の最終受理数は、一般研究報告数は、自由報告（一般研究報告 I）が 276、ポスターセッション（一般研究報告 II）が 7、テーマセッション（一般研究報告 III）が 123 でした。部会数は、自由報告が 44 部会、テーマセッションが 22 部会となりました。

このほか、国際交流委員会企画テーマセッションを 2 部会と、日韓ジョイントセッション、日中ジョイントセッションを企画・実施しました。

（以上、研究活動委員会 数土直紀）

（3）シンポジウムについて

シンポジウムは、「ダイバーシティ&インクルージョンの社会学：理論的・方法論的・実践的観点から」、「若手のキャリアパス：世代・ジェンダー・地域の視点から」の 2 部会と、日本社会学会創立 100 周年記念国際シンポジウム「激動する世界における社会学の役割」が開催されました。それぞれの総括は以下のとおりです。

■シンポジウム（1）「ダイバーシティ&インクルージョンの社会学——理論的・方法論的・実践的観点から」

担当委員：石川由香里・橋本摂子・原口弥生・樋口麻里・村上あかね

登壇者：成元哲（中京大学）・孫美幸（文教大学）・山根純佳（実践女子大学）

コメンテーター：中井美樹（立命館大学）、樋口麻里（北海道大学）

司会：村上あかね（桃山学院大学）、原口弥生（茨城大学）

2024 年度のシンポジウム（1）は、近年氾濫するダイバーシティ&インクルージョン（D & I）を主題に据え、多様性とは何か、そして社会的包摂とは何かをめぐる批判的かつ再帰的な検討の場として企画された。その背景には、マジョリティとマイノリティを分かつ線引きがそれほど自明ではないこと、むしろ恣意的かつ流動的であり誰もが何らかの点でつねに社会的包摂から取り残される立場となりうること、それゆえに不可視化されがちなマジョリティの特権が「D&I」の名のもとで再強化されうる可能性に、社会学は自覚的であらねばならないという共有された危機意識がある。

こうした主題に沿って、本シンポジウムでは、報告者・コメンテーターが方法論的多様性の観点から構成され、多様性と社会的包摂をめぐるジレンマに関して、いかなる議論と実践が重ねられているのかについて、それぞれのフィールドから報告がおこなわれた。狭義の「当事者」を解体することの必要性を論じるなかで、D&I に含まれる様々な前提を社会学の文脈から可視化し、その困難や限界を踏まえた流用（不）可能性について議論が交わされた。

第一報告者の成元哲氏からは、成氏が震災直後から12年間つづけられている福島の準被災地域での追跡調査結果から、「被災者」に認定されず制度的な支援のない自主避難者層が極めて不安定な状況下であり、社会や権威への不信から Collective Trauma を発症している現状が報告された。特に子どもを持つ母親層の不安と葛藤が著しく、原子力汚染へのリスク意識をめぐって同じ地域に暮らす母親間の分断状況が続いている。「保養」という言葉一つで先鋭化する彼女たちの分断を、その多声性を損なわずにどのように回復していくことができるか。「多様性」と「分断」の違いはどこに見出されるか。「多数派」や「少数派」に拘泥せず、互いに距離感をもって共に生きることはできないか。こうした問いから、「当事者」を一つの意見や立場に収斂させず、融和せずとも共存可能な知的枠組として「分断修復学」の必要性が提起された。

第二報告者で平和教育を専門とされる孫美幸氏からは、近年のD&Iへの懐疑について、ご自身のライフヒストリーにもとづく率直な意見が示された。在日コリアンの父をもち、指紋採取を強制された最後の世代である孫氏は、80-90年代に流行した「多文化共生」が徐々に疲弊して廃れていくさまを間近で目にした。孫氏が抱くD&Iへの懐疑は、主に後半部の「包摂」へと向けられる。自身や家族が少しでも生きやすくなる方法を必死で模索してきた側の者にとって、誰かが誰かを包摂すれば何かが良くなるという発想はもちえない。「包摂」を「周縁に押しやられたかわいそうな人たちの回収」から変えていくには、「違い」が生まれた歴史を知ること、つまり「記憶の分有」が鍵となる。こうした問題意識から、すべてのものが相互にかかわる「ホーリズム」(J.C.スマッツ)という概念の重要性が提起された。

第三報告者の山根純佳氏は、二つの報告にあるD&Iへの躊躇を自身もまた共有していると述べる。社会学は、不可視化されてきた経験を可視化する営みとしてあるが、そこでいわれる「包摂」は必ずしも現在D&Iで用いられるInclusionと同義ではない。近年ではインターセクショナルリティという概念が注目され、特定の属性が交差することで発動する社会的排除(置き去り)の存在が指摘されている。包摂と排除はまさに社会学の中心的課題だが、D&Iの隆盛によって社会学とのズレが無視されるとともに、社会学の成果に学術研究を超えた過大な規範的負荷がかかっているように思われる。一つの排除の指摘が、結果的に別の排除を助長してしまうことが現実起こりうる。だとしても、それによって最初の指摘が意味をなくすわけではない。社会学者に求められる「責任」とは、むしろ自分が何を「置き去り」にしたのかについて自覚することではないか、という問いが投げかけられた。

こうした3つの問題提起を受け、第一コメンテーターの中井美樹氏は、ご自身が関わってこられた社会階層研究の立場から、戦後に始まった社会階層と社会移動全国調査(SSM調査)における定期的な調査対象者拡大の取り組みを紹介された。また、こうした取り組みが従来の枠組みでは捉えきれない社会階層の変容に対応する一方、調査対象や調査手法が拡大・多様化することで、集約データとしての本来の価値が損なわれ、焦点が分散するというリスクが生じる点を指摘された。

第二コメンテーターである樋口麻里氏は、D&Iにおいてはequityという概念がもっとも重要だと論じ、ご自身がかかわる大学キャンパスでの活動から、D&Iにおいて／によっていかに公平性を実現しうるか、という観点から3つの報告にコメントされた。どうすれば分断された人びとを公平に遇することができるのか、自身にとって都合の悪い歴史を知りたがらない特権層にどうアプローチすべきか、また大学キャンパスのD&I活動において社会学者が担うべき役割はあるか。

3名の報告者がそれぞれの質問に答えられた後、フロアから多数の質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。本シンポジウムは15:00から18:00という遅い時間の開催であったにもかかわらず、会場には委員たちの事前予想を超える数の参加者がみられ、この問題への複数の領域にわたる関心の高さがうかがわれた。最後に、本シンポジウムの参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

(以上、担当研究活動委員一同)

■シンポジウム（２）若手のキャリアパス：世代・ジェンダー・地域の視点から

報告者

1. 林凌（武蔵大学）「非常勤講師職のパラドクス」の後に：若手研究者のキャリア形成をめぐる問題構図の変化
2. 竹内麻貴（国立社会保障・人口問題研究所）研究者の家族形成に必要な支援とは：別居婚でみえた課題
3. 石原俊（明治学院大学）大学改革と若手研究者問題の現代史——「大学院重点化世代」問題を忘却しないために

コメント：隠岐さや香（東京大学）

研究活動委員会担当委員：石島健太郎、川野英二、黒川すみれ、西村純子

このシンポジウムでは、若手研究者を取り巻く環境の近年の変化を踏まえつつ、今般の状況に通暁した御三方をお招きし、若手研究者のキャリアパスとその支援のあり方を論じていただいた。

第一報告の林先生からは、大学常勤職の雇用市場とその時系列的变化および地域差についてお話いただいた。JREC-INに掲載された求人情報の個票データの分析によれば、若手の就職状況には若干の改善傾向が見られ、非首都圏では相対的に公募が多い。これらは近年の肌感覚にも合致するところではあるが、その原因は採用数の増加よりも若手研究者の減少に起因している。ここから、すでに非常勤講師の採用時にみられる人手不足がより顕在化する中で、現在の大学教育を支えている専業非常勤講師の待遇をいかに考えるかという問題提起がなされた。

第二報告の竹内先生からは、研究者の家族形成の中でもとくに妊娠・出産期に注目してお話いただいた。若手研究者のキャリア形成は、家族形成の時期にも重なる。その際の葛藤や不利益が、とくに女性研究者によって経験されていることが既存のアンケート調査に基づいて論じられた。その上で、ご自身の経験も踏まえつつ、周囲の人々に可能な支援や配慮が示された。具体的には、プライベートな内容も含めて相談しやすい窓口や同僚の存在、妊娠に関する知識の普及、コロナ禍で普及したオンライン対応の柔軟な利用が求められる。また、背景要因として、非都市圏の人手不足や自然科学系を前提とした研究者養成の仕組みがもつ問題も指摘された。

第三報告の石原先生からは、現代の大学改革を政策文書に基づいて振り返り、現在の若手研究者をとりまく状況を歴史に置き直すかたちで論じていただいた。大学院重点化、国立大学法人化、そして直近の卓越大・大学ファンド体制というここ30年余の動向が概覧され、この改革の流れに乗るかたちで学生数・教員数を増やしてきた社会学は、それゆえにこそ、その負の側面、すなわち大学院重点化世代を半ば無視した若手支援や、研究職が嫌厭されることによる研究者不足といった問題に有効な対応ができないという問題が提示された。

コメンテーターは、研究と並んで学問の自由をめぐる運動にも関わってきた隠岐先生にお願いした。それぞれの報告に対し、分野や世代、ジェンダー、大学の運営主体といった背景要因との関連が指摘されたのち、社会学にとどまらない文系・理系間の比較や、諸外国との比較を通じて、日本の状況が位置づけられた。また、LGBTQ+の研究者の置かれた環境や、研究者の評価システムに潜む権威主義の問題など、幅広い論点に触れていただいた。

フロアにはやはり当事者である若手研究者の参加が目立ち、総合討論では個人の実感に基づく切実な意見が寄せられた。一方で、シニア世代の研究者も多く参加し、共に問題を考えている姿勢も印象的だった。今回のシンポジウムが、若手研究者のキャリア構築の参考になっていれば幸いである。そして、常勤職をもつ研究者がまずは身の回りのできることに取り組むとともに、よりマクロな状況に対しては学会としての取り組みが進むことに期待したい。

（以上、石島健太郎）

■日本社会学会創立 100 周年記念国際シンポジウム「激動する世界における社会学の役割」

講演者

1 Geoffrey Pleyers (国際社会学会会長・ルーヴァン・カトリック大学教授・国立科学研究基金 (FNRS) 上級研究フェロー) Global Sociology in a Turbulent World

2 上野千鶴子 (東京大学名誉教授・認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長) グランドセオリーから当事者の知へ

司会者: 佐藤嘉倫 (京都先端科学大学)、森千香子 (同志社大学)

本シンポジウムは日本社会学会創立 100 周年を記念したものであり、2つの目的を持っていた。第1の目的は、100年間にわたる学会の知的蓄積を踏まえて、これからの100年に向けて日本の社会学はどうあるべきかを講演者、参加者とともに考える機会とすることである。第2の目的は、2024年が2014年世界社会学会議横浜大会から10年目という節目の年でもあるので、日本の社会学のさらなる国際化の契機とすることである。

この2つの目的にとってもっとも相応しい講演者として、国際社会学会会長の Geoffrey Pleyers 氏と学問と実践の両面でさまざまなフロンティアを切り拓いてきた上野千鶴子会員に講演を依頼したところお二人とも快諾していただき、知的刺激に満ち溢れたシンポジウムを開催することができた。

Pleyers 氏は、現代世界がさまざまな危機に直面するなか、社会学も世界各地で複合的な圧力に晒されているが、それは社会学を刷新する機会にもなっていると指摘した。フェミニズムやポストコロニアリズムなどの批判的パースペクティブとグローバルサウスの知的潮流にもとづいた新たな概念が次々に生み出され、社会学のあり方を大きく変えてきた。そして西洋中心主義を乗り越えると同時に、相対主義や偏狭なローカリズムにも陥ることなく、相互依存の高まる世界に開かれたグローバルな対話を重視する社会学が求められていると述べ、それによって社会学は自らの危機を脱して、多様な視点から現代世界の危機に取り組むことができるという希望が示された。

上野氏は、女性学が女性を研究の客体ではなく主体とすることで、社会科学を支配してきた客観性・中立性の神話と闘ってきたことを指摘した。そして構築主義やポストコロニアリズムの影響のもと「誰が、何のために語るのか」というポジショナリティ概念が生まれ、これまで学問から排除されてきた「当事者」や「現場」から生まれる知を重視する当事者研究が拡大し、社会学のあり方に見直しを迫ってきた。あらゆる理論は部分的であると述べた上で、複雑な社会を理解するにはグランドセオリーではなく多元的な理論を組み合わせる利用することが大事であり、そのためにはもっとカテゴリーを、もっと理論を、と求めるべきである、という重要な指摘で講演を締めくくった。

お二人の講演の後には実に多くの質問が寄せられた。とてもシンポジウム時間内ですべてを紹介することはできなかった。司会の方で取捨選択してお二人に質問を投げかけた。すべての質問が社会学の根源に触れる質問だったが、お二人は誠実にかつ丁寧に答えて下さった。高校生から「上野先生はなんでフェミニストになったんですか？」という根本的な質問が寄せられたことも印象に残る。高校生、大学生をはじめとして一般市民に公開されたシンポジウムならではの意外性に富んだ、そして社会学の基盤を問い直す討論の場になった。

最後に、このような大掛かりな国際シンポジウムの実現に尽力して下さった落合恵美子大会実行委員会委員長、藤野敦子副委員長をはじめとして京都産業大学関係者の皆様に心より御礼申しあげる。ありがとうございました。

(以上、佐藤嘉倫・森千香子)

(4) 招待講演について

大会第1日目(11月8日)の午後に2024年度日本社会学会奨励賞授賞式が举行された。まず佐藤嘉倫会長より、2名の受賞者に対して賞状と副賞が手渡され、トラベルアワード受賞者紹介に引き続き、同じ会場で同賞受賞者による招待講演が行われた。本年度の受賞者ならびに受賞作品は以下の通りである。なお、受賞作の概略とその選評は、本ニュースの記事「VI. 第23回日本社会学会奨励賞」で紹介されている。そちらもあわせて参照いただきたい。

[奨励賞・論文の部]

松浦 優, 2023, 「抹消の現象学的社会学」『社会学評論』第74巻第1号, 158-174頁。

[奨励賞・著書の部]

林 凌, 2023, 『〈消費者〉の誕生—近代日本における消費者主権の系譜と新自由主義』以文社, 全504頁。

招待講演に先立ち、稲月正学会賞委員長から開会の辞と受賞者への祝辞が述べられた。論文の部の受賞者講演は、山根真理選考委員長(論文の部)の司会により進行された。まず委員長より受賞作の選評が詳細に述べられた後(内容については上記の本紙記事参照)、論文の部の受賞者の招待講演が行われた。

松浦会員の講演「「わかりづらい差別現象」はいかにして成立可能になるのか—現象学的社会学からのアプローチ」では、冒頭で氏の研究関心やシュツツを読もうと思ったきっかけが話された後、受賞論文の内容がテンポよく説明された。その主たる関心の対象は、社会的にカテゴリー化されておらず嫌悪の対象としてすらイメージされることのない事態、たとえば二次元性愛やフィクトセクシャルである。そして「非類型化」(類型化されていないものが類型化されないままとなる現象)をとともなう周縁化を「抹消」という新しい概念で捉えることが提唱される。さらに抹消がどのように生じ維持されるのかなどが、シュツツを手がかりに論じられた。そのうえで、抹消が差別なのか、抹消を踏まえて二次元性愛を今後どう議論すべきなのか、といった論文執筆後の思索の展開が披瀝された。それに対してフロアーから、二次元性愛者はすでに「オタク」として類型化されているのでは、など多くの質問が出て活発な議論が展開された。

後半は後藤範章選考委員長(著書の部)が司会を引き継ぎ、受賞作の選評が詳細に述べられた。

林凌会員の講演「〈消費者〉の存在論—あるいは社会学と地理学の間を埋めることの意味について」では、なぜ社会改良主体としての消費者像(消費組合運動)と庇護対象としての消費者像(統制経済論)が併存し得たのか、との問いが提起される。それに答えるべく、消費者言説の社会的背景とそれらに対する知識人の認識や論理が、受賞作の章に沿って言説の出現から展開に至るまで跡づけられ、戦間期と戦後日本における消費者言説の構図が表とともに分かりやすく提示された。そのうえで受賞作には、日本を対象としたフーコー統治論の応用研究、近代日本社会における社会運動・社会思想B面史、および〈消費者〉の存在論という3つの側面があるとの冒頭での整理に立ち返り、それらの各論が展開された。最後に関東北部の都市の写真やメッシュマップを見せながら、受賞作の背景に人文地理学・都市研究・商業史があることが告げられ、それに関する質問を端緒として活発な質疑応答がなされた。

(学会賞委員会 稲月正・平沢和司)

2. ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョン推進委員会新設のお知らせ

2023年11月4日、日本社会学会理事会は「ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョン推進に向けてのガイドライン」を制定しました。これを受けて今期理事会では、ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョンを推進するワーキンググループが設置されました。ワーキンググループでは2回のオンライン会議(2024年2月、4月)、メール審議、理事会における意見募集(2024年8月)を行ない、2024年10月20日、理事会は、ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョン推進委員会の新設を決定しました。以後、新委員会は、以下の4つの活動を行う予定です。

1. あらゆる学会活動において、性別、SOGI、人種、肌の色、エスニシティ、国籍、宗教、年齢・世代、障害の有無など、人々の違いや多様性を尊重し、人権の擁護と学会活動の一層の活性化を推進するための活動を行う。
2. 学会大会や学会活動において、会員の多様なニーズに対して可能な限り対応し、また、必要な合理的な配慮を拡充するための活動を行う。
3. 学会大会や学会活動において、人権の擁護と会員の心理的安全性を確保し、あらゆるタイプのハラスメント行為を許さないための活動を行う。
4. ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョン推進に関わる各種法令等を学会として遵守するとともに、それらのより実質的な推進に向けて、自発的な取り組みを進める活動を行う。

(以上、ジェンダー平等・ダイバーシティ&インクルージョン推進のためのワーキンググループ担当理事
赤川学・釜野さおり)

3. 広報委員会からのお知らせ

①大会時リアルタイム案内の実施

広報委員会では、アメリカ社会学会や他学会の取り組みを参考にして、2024年大会時にX(旧Twitter)を用いて会場の様子やルートの案内、総会やシンポジウム、出版社ブースの紹介などをリアルタイムに行いました。好評ということで今後も実施させていただく予定ですので、フォローやリポストなど、よろしくお願いいたします。

アカウント名：日本社会学会 広報委員会 /JSS Publicity Committee ユーザ名：@jsspublicity

URL：<https://twitter.com/jsspublicity>

②「会員・関連団体等からのお知らせ」コーナー【再掲】

前回のニューズレターでもお伝えしましたように、学会ホームページ内の「会員・関連団体等からのお知らせ」コーナーへの記事掲載依頼は、「掲載希望受付フォーム」よりお願いいたします。

(以上、広報担当理事 濱西栄司・三井さよ)

4. 社会学系コンソーシアムからのお知らせ

公開シンポジウム「〈原爆〉をめぐる記憶と継承」開催のお知らせ

日本学術会議社会学委員会、社会学系コンソーシアム主催の公開シンポジウム(Zoom ウェビナーによるオンライン開催)を下記日程で開催いたします。

公開シンポジウム「〈原爆〉をめぐる記憶と継承」

主催：日本学術会議社会学委員会、社会学系コンソーシアム

日時：2025年3月8日（土）13:00～16:30

方法：オンライン開催（Zoom ウェビナーによるオンライン開催）

（登録フォームにご記入いただいたアドレスに、後日、Zoom ウェビナーの URL を送付）

参加：一般参加可能、参加費無料です。以下の URL にアクセスして必要事項を入力ください。先着 1,000 名まで参加可能です。こちらの登録フォームに記入いただいたメールアドレスに、後日、参加に必要な Zoom ウェビナー URL をご案内します。

<https://forms.gle/pN54bHQRGEOl4u5C7>

開催趣旨

2025 年は戦後 80 年である。現在においても、ウクライナ戦争では多くの犠牲が生まれ、イスラエル・ガザでも戦禍が更に深刻化し、世界は混迷の中にある。そして、核兵器が実際に使用される懸念がかつてないほど高まっていると言ってよい。その一方で、今日においては、〈戦争〉をめぐる記憶と継承、とりわけ〈原爆〉の記憶と継承はますます困難となりつつある。

唯一の〈被爆国〉である日本社会において〈原爆〉や〈被爆〉について語り継ぎ、継承されてきた記憶が、被爆者たちが年を重ねる中で語ることが困難となっており、被爆者の語りを聴くこともさえも制度化・遺産化されざるを得ない状況にある。すでに被爆者たちが語る場さえ失われている事態さえ生じている。こうした中で、戦後日本社会における〈原爆〉の記憶と継承をめぐるこれまでどのようなことが生じてきたのか、現在何が起きているのか、〈被爆〉の記憶を継承することがいかに困難／可能となっているのか、そもそも〈被爆〉をめぐる継承すべき記憶とはいったい何であるのか、あるいは被爆者による語り以外にも別様に記憶を継承していく実践はありうるのか。本シンポジウムではこうした問いを複眼的に検討したい。このシンポジウムの企画と設計によって、戦後 80 年を数える 2025 年にこそ、戦後日本社会における〈原爆〉をめぐる記憶と継承について活発な議論ができればと切に願う。

プログラム

司会 天田城介（中央大学文学部教授）

開会の挨拶： 白波瀬佐和子（日本学術会議会員、東京大学大学院農学生命科学研究科特任教授）

浅川達人（日本学術会議連携会員、早稲田大学人間科学学術院教授）

趣旨説明： 天田城介（中央大学文学部教授）

第一報告： 根本雅也（一橋大学大学院社会学研究科講師）

「なにを継承するのか——「被爆地」における「継承」の力学と原爆被害者の生」（仮題）

第二報告： 直野章子（京都大学人文科学研究所教授）

「空から放たれた死——空爆史のなかの原爆」（仮題）

第三報告： 深谷直弘（長崎県立大学地域創造学部准教授）

「地域と原爆——長崎での記憶継承の実践と課題」（仮題）

討論者： 野上元（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

朴沙羅（ヘルシンキ大学文学部講師）

総合討論（質疑応答）

閉会の挨拶： 有田伸（日本学術会議会員、東京大学社会科学研究所教授）

5. 国際発信強化委員会からのお知らせ

「ISA Forum of Sociology トラベルグラント」の募集

日本社会学会は、学会員の研究活動の国際化を支援するため、2025年7月6日～7月11日にモロッコ・ラバトで開催される ISA Forum of Sociology で報告する方の旅費の補助を行います。選考の上、最大3名まで、1名あたり30万円を補助します。今回から、助成人数、金額ともに拡大しての募集です。ふるってご応募ください。

対象：

- ・2025年のISA Forum of Sociologyにて研究報告がアクセプトされている会員
- ・国際発信の意欲がある研究歴の比較的短い（修士号取得後20年以内）の研究者・大学院生（後日履歴に関する情報を求めることがあります）
- ・所属機関や学振などから助成があっても審査の対象とはしますが、ない応募者を優先します

応募方法や報告後の義務の詳細については、以下のサイトをご覧ください。

<https://jss-sociology.org/news/jimukyoku/board/20241209post-17158/>

応募締切：2025年1月31日（金）

（以上、国際発信強化委員会 委員長 今井 順）

VI. 第23回日本社会学会奨励賞

1. 2024年度日本社会学会奨励賞受賞作

[奨励賞・論文の部]

松浦 優「抹消の現象学的社会学」『社会学評論』第74巻第1号

[奨励賞・著書の部]

林 凌『〈消費者〉の誕生——近代日本における消費者主権の系譜と新自由主義』以文社

2. 各委員氏名（敬称略・50音順にて表記）

【2024年度「論文の部」選考委員会】

委員長 山根真理（愛知教育大学）

委員 江頭大蔵（広島大学） 斎藤友里子（法政大学） 西村雄郎（大谷大学）
仁平典宏（東京大学） 藤澤三佳（京都造形芸術大学）

【2024年度「著書の部」選考委員会】

委員長 後藤範章（日本大学）

委員 阿部晃士（山形大学） 蘭由岐子（追手門学院大学） 内田龍史（関西大学）
竹ノ下弘久（慶応義塾大学） 西倉実季（東京理科大学）

【2024年度 推薦委員】

大久保遼（明治学院大学） 川端浩平（津田塾大学） 高橋征仁（山口大学）
高畑幸（静岡県立大学） 直野章子（京都大学） 永吉希久子（東京大学）
西城戸誠（早稲田大学） 本郷正武（桃山学院大学） 前田拓也（神戸学院大学）
吉田崇（静岡大学）

徐阿貴（福岡女子大学）【『JJS』編集委員】

中村英代（日本大学）【『社会学評論』編集委員】

新倉貴仁（成城大学）【『社会学評論』編集委員】

平井太郎（弘前大学）【『社会学評論』編集委員】

【2024年度 学会賞委員会】

委員長 稲月正（北九州市立大学）

副委員長 平沢和司（北海道大学）

委員 小内純子（札幌学院大学） 武田尚子（早稲田大学）

松本康（大妻女子大学） 山田信行（駒澤大学）

幹事 桑畑洋一郎（山口大学）

3. 選考経過

「論文の部」の第1回選考委員会では、互選により山根真理委員が委員長に選出された。推薦があった論文21点の資格確認を行い、19点を審査対象とした。また対象論文の著者の関係者は当該論文の審査に加わらないことを確認した。その上で委員は全論文を評価し、第1段階の選考で4点が最終候補に残った。第2回選考委員会で最終候補論文を慎重に審議した結果、全会一致で上記の論文を受賞論文として選出した。

「著書の部」の第1回選考委員会では、互選により後藤範章委員が委員長に選出された。推薦された20冊の資格確認を行い、19冊を審査対象とした。また対象作品の著者の関係者は当該作品の審査に加わらないことを確認した。その上で1冊につき2名の委員が評価し、2段階の選考を経て3冊を最終選考の対象とした。この3冊を全委員が精読し、第2回選考委員会で集中的に審議した結果、全会一致で上記の著書を受賞作品として選出した。

学会賞委員会は、これらの結果を承認し、上記の通り第23回奨励賞受賞作を決定した。

4. 選評

【論文の部】

本論文は、差別や排除に関する議論に対して、「排除の対象としてあからさまに名指されるのとは異なる、差異化をとまわらない周縁化」(p.158)が存在することを指摘し、それを「抹消」と概念化し、現象学的社会学に依拠して理論的考察を行った理論研究論文である。著者は近年の「明確に差異化されてこなかったカテゴリー」に関する社会現象を扱った研究に注目し、J. バトラーの「予めの排除」論を経て、現象学的社会学理論の検討に向かっている。とりわけA. シュッツのレリヴァンス論の検討を通して、抹消を「非類型化をとまなう周縁化」と定義する。この理解を通して、『われわれ』を『われわれ』たらしめるために『われわれ』のなかでの差異を有意味化させないという『抹消』が、『われわれ』と『あなたたち』の間での『排除』に論理的に先行している」(p.167)という著者独自の理解が示される。さらに、論文の最後では、抹消を維持するレリヴァンスの作用ゆえに、抹消を問い直すことには困難が伴うが不可能ではないこと、「他者の主観的視点を尊重することによって、既存の類型では表現できないあり方についても理解を放棄しないこと」(p.170)に可能性への手がかりがあることが論じられている。

本論文が受賞に値すると判断した理由は二点に要約できる。第一に、社会学の基礎理論を引きながら概念と理論の精緻化に取り組む仕事を通して、差別や排除に関連する事象に関して、理論面で独自性のある理解に到達していることである。差別や排除に関連して、「我々がやっているが言葉が与えられていない行為もしくは現象」に対して言葉を与え、既存の社会学の理論的、概念的体系に位置づけていく挑戦的な試みであり、受賞に値する理論研究論文として高く評価された。

第二に、抹消概念によって差別や排除に関連する現象を理解することの認識論的可能性が大きく、そのことによる実践的示唆が期待されることである。本論文は純粋理論研究であり、これらの点について本論文からはその萌芽がみられる段階である。選考委員会においても、抹消概念によって、本論文で例示されている「二次元性愛」「フィクトセクシュアル」以外にどのような現象が説明されるのか、展開されていないことを課題として指摘する意見があった。しかしその一方で、「非類型化をとまなう周縁化」である抹消は、著者が例示する、セクシュアリティに関連する現代のカテゴリーの創出のテーマに留まらず、差別や排除に関連する主題を扱う多様なテーマ群において、見えなかったものを見えるようにする、射程の広い概念となる可能性を秘めていると評価する意見もだされた。現時点では潜在的可能性であるが、著者自身が今後の課題としてあげているように、差別と抹消との関係の精緻な理論化と、経験的研究との対話を通して概念を鍛えることで、差別や偏見に関連する事象に関する、より普遍的な理論へと展開し、人間社会の新たなあり方についての洞察をもたらすことが、大いに期待される。

【著書の部】

本書は、賀川豊彦らの消費組合運動家、奥むめおらの婦人運動家、本位田祥男らの経済学者、向井鹿松らの商学者といった、マルクス主義に与しなかった知識人による〈消費者〉言説を戦前期(概ね1900年代以降)に遡っ

て丹念に紐解くことによって、「〈消費者〉の歴史的形成過程」を跡づけたスケールの大きな意欲作である。消費者史研究・消費社会研究・社会経済思想史研究に貢献するのみならず、「現代日本」社会に消費者主権の名のもとに浸透した新自由主義受容の系譜を解き明かす歴史社会学的研究でもある。

従来の消費者史研究では、戦後民主主義的な色彩が濃い「消費者主権」概念は戦後になって現れた、とされてきた。そうした〈消費者〉言説が戦前期日本で成立するはずがない（「近代日本」の国家体制・経済政策と米英（英語圏の）社会との非対応性）という「背後仮説」が、先行研究で共有されてきたからである。本書は、そうした「前提」を社会改良主体としての／庇護対象としての〔系譜を異にする〕〈消費者〉言説が、資本家と労働者の対立を乗り越えるために一定の結びつきを保ちながら相補的に生成されていった歴史的形成過程を掘り起こし分析すること（＝背後仮説「批判」）を通して鮮やかに覆す。そして、新自由主義思想の核心をなす「消費者主権」概念と「新自由主義的統治術」（フーコー）を乗り越え、本書の検討と考察によって導かれる消費者（主権）概念が社会の諸矛盾の解決に寄与し「現状を変える鍵」となり得ることをも示唆している。

骨太でズッシリと重厚な作品に仕上がっている。独創性や完成度の高さに加えて、他の研究領域への展開可能性や多領域の研究者との対話の促進可能性などといった点でも、本書は高く評価される。各委員からも、「思想的にこれまで見出されなかった線を浮かび上がらせた力量は大いに評価でき、議論の拡がりからも学会賞にふさわしい」、「著者の主張と議論の内容が理論的で説得的あり、実証と理論が有機的に結びついて考察がなされている」、「知的好奇心を掻き立てられる、意外性のある作品」、「『新しい知』をもたらしてくれる魅力ある著作」、「従来の『消費者』をめぐる諸研究に抜本的な再考を迫る成果」などと、高く評価する意見が多数出された。

他方で、「最終章の『結論』、特に現代消費社会の社会変革の可能性を扱っている部分に釈然としない点が残っており（この後どう展開していくのが不明瞭）、結論の妥当性／説得性に関しては評価を留保しておきたい」、「言説のみならずそれがどう人々に受け入れられているのかということを問うことにも接続できれば、さらに豊かな議論が展開できたのではないか」、「本書の『限界』を、本書の中で著者自身が明示的に示せていない」などといった意見もあった。本研究の主題から離れた指摘も含まれているので、無い物ねだりが過ぎるのかも知れないが、逆に著者の今後の研究に対する期待の大きさが反映していると捉えることができるだろう。

（学会賞委員会 稲月正・平沢和司）